



# 透明なナイフ



sari-sari

「合宿？」

大盛りのチャーハンのお皿を僕の前において、母さんが言う。塾が終わって、帰宅した僕の八時過ぎの晩ご飯。チャーハン、エビチリ、卵スープに春雨サラダ、飲み物はコーラと言いたいところだけど、母さんがそれを許さない。せっかく中華尽くしにした晩ご飯の雰囲気壊すんじゃないわよ、と飲み物は強制的にウーロン茶になった。僕はチャーハンをさっそくスプーンで山とすくって、口に運ぶ。

「あち、あち、今日、先生から発表が、あつ……」

「一気にかき込むからでしょ。それに、食べながら話すのはやめなさい」

ごめん、と言う代わりに、僕は軽く手を上げてこたえる。ウーロン茶を流し込むと、ようやく熱いのが収まった。この世に、氷の入ったグラスウーロン茶が存在してよかった。コーラばかりが飲み物じゃないんだ。見直したぞ、コーラ以外の飲み物。僕は呼吸を整えながら、グラスを見つめて思う。

「ほらね、コーラにしなくて良かった。熱いものにはウーロン茶でしょ」

母さんが僕の前イスに座りながら言う。その顔には得意げな笑顔が浮かんでいた。ヘアバンドをして髪を後ろで一つにしているから、卵みみたいな顔の輪郭が際立っている。

「別に」

僕は目を合わさずに、春雨サラダのきゅうりをぼりぼりとかじる。そんな僕を見て母さんは、ふふ、と意味ありげに笑った。何だよ、まったく。

「で、何日間？ 場所は？」

これ、と僕はかたわらのバッグから今日、顧問の先生から配られたプリントを出す。

「ふんふん、なるほどね。長野県に二泊三日で。へえ、いいじゃない。あつ、お土産なんて変な気は遣わなくていいからね。父さんと母さん、長野のリンゴが大好きだけど、お土産なんていらなからね」

母さんはくりくりとした大きな目で僕を見て言う。学生時代にずっと演劇部だった母さんの声の抑ようは大したもの、説得力がある。その声と目で訴えかけられると、僕はいつも、はいとしか言えなくなる。僕もいい歳だから、これを卒業したいんだよなあ。そんなことを考えて、僕は少しぶっきらぼうに返事をする。

「よさそうなものがあったら、買ってくるよ」

「やだ、今の言い方、父さんにそっくり。でもそう言ったって、父さんと同じで、結局忘れて何も買ってこないのよね」「忘れないよ。買うってば」

父さんと一緒にするな。最後に心に浮かんだ言葉は、ウーロン茶と一緒にごくりと飲み込む。

ワイルドさをアピールしようと、僕はエビチリを箸で豪快につかんで食べた。いつもならたっぷりのショウガが効いているはずの母さん手作りのそれは、なぜか今日に限って大量の唐辛子入りだった。口の中でプロボクサー百人が大暴れしているみたいだ。辛いなんてもんじゃない。あ

ちこちをポカスカ殴られているようで痛くて、僕の目に涙がにじむ。いい歳をした中学一年生の僕は、辛い物がとても苦手なのだ。

「ん、何よ野菊。顔を真っ赤にして。もしかして、辛かったの！？ やだ、私ったら間違ってお父さん用に辛くした方を出しちゃった！」

やだ、も一、ごめん、と繰り返し言いながら母さんはあわてて僕の口元にウーロン茶を持ってくる。

「大丈夫？ 落ち着いた？ ほら、ウーロン茶があってよかったでしょ」

なんてめげない人なんだ。グラスを握りしめ、僕は素直にうなづく。でも、確かに今は口の中で、四、五人のボクサーがストレッチをしている感じだ。だいぶ大人しくなった。

「私ったら、ぼーっとしてたのかしら。これからは気をつけなきゃ。っていっても、豆板醤を少し多めに入れたくらいなんだけどねえ。子どもには辛かったか」

「辛くないって。味つけに、少し驚いただけだよ」

はいはい、と母さんはエビチリの皿を持って素早く立ち上がり、キッチンへと歩いて行った。

「こっちが本当の野菊用」

僕の前に新しい皿を置く。僕は皿を注意深く見つめ、箸の先にソースを少しだけつけてなめた。いつもの味だ。僕は今度こそ、豪快に口に運ぶ。

「どう、これは美味しいでしょ」

にっこりとほほ笑む母さんのTシャツの胸元では、それに負けないぐらいの笑みを見せる巨大なニコちゃんマーク。「うん……。それよりも、そのTシャツさあ……」

「ああ、これ？ 気づいた？ そうなの、この間内田さんの奥さんに誘われて、母さん初めて下北沢に行ったのよ。で、古着屋さんに寄っちゃった。デパートで買うよりも意外に安くて、掘り出し物があるって言われてね」

「それで、そのTシャツが、そのときの……」

「分かってるじゃない、野菊ったら。この間、エアロビに着ていたら、皆に可愛いって言われちゃった。今日もね、これでスーパーに買い物に行ったら、あんたのクラスメートのスズキ君のお母さんに会ってね。スズキママにも、そういうデザインの服が似合っとうらやましい、って笑顔で言われたの。うふふ。このTシャツ皆からほめられて、母さんのお気に入りの一枚になっちゃった。いいでしょ、これ」

母さんは胸元のニコちゃんを僕に、ぐいっと見せた。ニコちゃんと目を合わさないよう下を向いて、ふい、っと僕は間の抜けた返事をする。

ついにシモキタに上陸したのか……。そして、その服でスーパーにまで行っちゃったのか……。妙なTシャツで外出するのはやめてくれと何度お願いしても、母さんにはまったくもって妙じゃない！ と耳を貸してくれない。嫌味を言ったスズキ君のお母さんは、今日の出来事をスズキ君にすでに話しているだろう。ああ、僕は明日学校でからかわれるんだ。

演劇部時代に本格的なミュージカルもやっていたという母さんは、それを生かして、週に何回か昼間、スポーツクラブでエアロビクスのインストラクターとして働いている。そのおかげで動作がぎびぎびしているのはいいんだけど、母さんは普段着としてもエアロビのときの服を着てし

まう。だから、なんていうかものすごく、服がヒップホップしていて、息子の僕としては恥ずかしい。

特にこの季節、夏場のTシャツのセンスが深刻な問題になっている。今日の、黒のタンクトップの上に、白地にニコちゃんがプリントされたぶかぶかのTシャツ（ニコちゃんの下にやっぱり大きく、SMILE、って書いてある）なんてまだいい方で、去年は、I♥NY（もちろん、母さんは行ったことない）ってのを着たかと思えば、その次の日には、侍って字が胸元に大きくプリントされたカーキ色のぶかぶかのを着たりして（どこで見つけてくるんだよ、そんなもの……）、僕の家で友達が遊びに来た時のちょっとした名物になった。

「それにしても、二泊三日で夏の長野県か。うらやましいなあ。合宿で行くとは言え、みんなはしゃいで絶対楽しいわよね」

母さんは大きくうんうんとうなづく。つられて、胸元のニコちゃんも、くによくにやとうなづいた。まあね、僕が伏し目がちに答えた瞬間、玄関のインターホンが鳴った。父さんねきっと、と母さんが席を立つ。

お土産を買ってこなかったら、きっと僕は半殺しだろうな。はあ、お小遣い足りるかなあ……。恨めしい目をして母さんの背中を見つめたって（ちなみに、Tシャツの裏には巨大な泣き顔のニコちゃん。その下には、DON'T CRYってでかでかと）、僕の思いは届くはずもない。はあ、僕はため息をつく。覚悟を決めるしかないか。

「野菊がね……、そうなの、夏休み中に……」

廊下を歩きながら、母さんが父さんに説明する声が聞こえる。ふう、僕はもう一度ため息をつく。お土産のことじゃない。もうそれは、あきらめがついた。僕のため息が向かった先は……

「ただいま。なんだ、野菊、今日は早いな」

父さんはネクタイをゆるめながら、僕の方を見ずにぼそりとひとりごとのように話した。会社に行って帰って来るだけなのに、父さんはまるで呪いの言葉を口にするように、行ってきますとただいま、を言う。

まあね、なんていう味気ない僕の返事は父さんの耳に全く入っていないようだ。遠くを見つめ、その指はテレビのリモコンを求めて、テーブルの上をゆっくりとさまよっている。リモコンは僕の手もとにあった。隠しちゃおうかな。僕はそれをぎゅっと握りしめ、父さんの方へと滑らせた。リモコンの先が父さんの爪にコツンと当たる。ああ、サンキュ、かすれ声の返事が返ってきた。

「イスに座るぐらいしたらどうなの」

母さんが缶ビールとグラス、おつまみをお盆に乗せて運んできた。おう、相づちを打ちながら父さんはテレビのスイッチをつけ、イスに腰をおろす。僕の、斜め前の席。

エビチリ、春雨サラダ(どちらも父さん用に辛めの味付け)、マヨネーズが添えられた野菜ステック(ちなみにマヨネーズは母さんのお手製。レモンが効いてていい感じ)が食卓に並ぶ。

ぷしゅっと音をさせ母さんが缶ビールを開けた。それが合図みたいに、父さんがグラスを斜めにかたむけ、ビールが注がれる。注がれる間、父さんは片手でネクタイをすりと外し、かたわらのイスにかけた。

「あて、もう少し何か作ろうか？」

「いや、これだけあれば十分だよ。ありがとう」

父さんは重たいものでも持つみたいに、のろのろと箸を手取る。そんな父さんの様子を気にも留めず、母さんは「そう、じゃあ私はお風呂入って来るわね。食べ終わった食器は流しに置いてくれればいから。お風呂を出た後で洗うわ」

と言い、さりげなくネクタイを持って居間を出て行った。

さっき僕の口内にボクサーを出現させたエビチリを、父さんは何でもない風に一口食べる。そして、うん、と何に納得したのか軽くうなづいた。

「そのエビチリ辛くない？」

僕は尋ねる。ネクタイを外して身軽になった父さんは、いつもよりおしゃべりになるだろうか。そうでもないよ、とテレビ画面を見つめたままつぶやいて、父さんはそれきり何も言わない。ぴ、ぴ、ぴ。リモコンを片手に持ち、父さんがザッピングを始めた。

ニュース(レジから二千円を奪って逮捕された強盗が10代の少年だった、とか)音楽番組(新曲は、どんなにつらくても前を向いて笑顔でいこうよってメッセージを込めて作りました、とか)、ドキュメンタリー(社会が病んでいる! 孤独死におびえる高齢者、とか)、色んな人の、それぞれの人生が、僕の目の前をくるくると通り過ぎていく。僕は画面からそっと目をそらした。

僕は父さんの横顔を見た。皆が僕とそっくりだっていう、少し腫れぼったい奥二重の目。その

目にもまた、それぞれの人生が束の間映っては消える。

でもどうやら父さんは、そのことを何とも思っていないようだ。目から飛び込んだ情報がどういう仕組みで脳みそに届くか、なんて僕は知らない。けれど、もしかしたら父さんは目と脳みそをつなぐ大事な何かを、通行禁止にして生きているのかもしれない。黒目より先、立ち入り禁止。そうでもしないと、とてもじゃないけど毎日生きていくのがつらいから。

本音を言うと、僕だって、通せんぼしたい。そんな父さんの姿を見たくない。どうしても目撃してしまうというなら、もう何も感じないくらい僕の神経をめちゃくちゃにした後にしてほしい。そう思った直後に、心の中で誰かの声が聞こえた。

本当かい？ 弱虫、本当にその覚悟はあるのかい？

ごめんなさい。うそです。そうされるのは、父さんのように何を見ても、何も見てないのと同じになるのは、やっぱりこわい。こわいです。誰か助けてください。

父さんのようになりたくないなんて、考えたくないのに、止められない。それなのに、父さんと距離を置けばおくほど、もっと甘えてみたいと心の中でぐずる僕は、誰からも相手にされない大きな赤ん坊だ。

おかしいな、前はこんなじゃなかったのに。この頃は、こんなことばかり頭に浮かんで、何だっていうんだよ。僕は、自分で自分がめんどくさい。

び、またチャンネルが変わった。今度のは、地上波初登場の映画。僕がちょっとだけいいなって思ってる、アイドルの女の子が出ているやつだ。

「お前は何か観たいものあるか？」

なんで父さんはそんなこと聞くのさ。僕は思った。自分の息子がどんな番組が好きかぐらい、大体の見当をつけてよ。

でも、僕も僕だ。「この映画観たいな。僕が気になってるアイドルの子が出てるんだ」なんで僕はこんな簡単なことが言えないんだろう。自分のしたいことを家族に伝えるなんて、たやすいことじゃないか。友達には言えるだろ？ 同じことじゃないか、言っちゃえ、言っちゃえよ僕。

「ううん、今の時間帯は別にない」

そうか、と父さんは再びチャンネルを変える。バラエティ番組が映ったところで手を止めた。あ、これ僕の嫌いな番組だ。

「野菊はこういうの好きだろ」

父さんはリモコンをテーブルに置く。ビールを飲みながら画面を見つめ、ははと乾いた笑い声をもらした。

番組は、全国から出場したい家族を募集して、家族みんなで巨大迷路を脱出するためゲームに挑戦する近頃人気のもの。でも僕は、なんだか予定調和な感じがして、観ていると白けた気分になってくる。

「ほら、この男の子、十二歳だってよ。野菊と同じ年じゃないか？ へえ、新婚旅行に行けなかった両親に賞金で旅行に行ってほしいって、立派だなあ」

「テレビだもん。そう言うに決まってるよ。賞金は自分が独り占めする。ゲームと漫画と最新のスマートフォンと、欲しいものをぜーんぶ手に入れてやるんだ、なんて全国に向けて言う人間は

いないって」

僕の言葉に、そりゃそうだろうけどさ、父さんは苦笑いする。

だめなのは、僕は思う。だめなのは、毎日のテレビ番組に、出来事に、いちいちくよくよしてしまう僕。出口がないって知ってて入った迷路の途中で、出口がないことに腹を立てる、僕は自分勝手。

そこから僕らは黙々と食事をした。父さんがエビチリを飲み込む瞬間、僕はスプーンを口に運ぶ。僕がチャーハンを喉に流し込む瞬間、父さんは野菜スティックをかじる。まるでシーソーみたいに、僕らは交互に口へ物を詰め込んだ。これなら、話をしない理由ができていい。だって、食べながら話すのはマナー違反なんですよ。だったら、言葉を発する瞬間を作らなければいいんだ。

気づけば、この部屋はとても静かになっていた。テレビの効果音が派手な分、リビングの無言がさらに際立つ。耳障りな静寂っていうものが、この世に存在するんだ。なんだか僕は耳が痛い。痛い、痛い。

「母さんから聞いたぞ。部活で合宿に行くんだってな」

と、父さん。

「うん、八月に二泊三日で」

と、僕。

「場所はどこだっけ？」

「長野」

「夏の長野。いいなあ。長野のりんごはうまいんだよなあ」

「あ、そ」

「父さんの分は気にしなくていいけど、もし時間があったら、母さんには何か土産を買ってきてやれよ。父さんが小遣いをやるから」

「別に」

「お前、もう少し長く、文章で話せよ」

父さんは眉をしかめ、僕の顔を見る代わりに、なぜかビールが注がれたグラスの底をじっと見つめる。僕は無言。こっちを向いて話せばいいのに。そう伝えたいけれど、僕は無言。

「学校で何か嫌なことでもあったのか？ さっきから元気がないぞ」

「別に、いつもどおりだよ」

「女の子にでもふられたか」

僕は言葉に詰まる。

「なんだ凶星か？ 好きな子に冷たくされたか」

「うるさいな」

僕の口から飛び出たのは、言葉じゃなくてナイフだったみたい。それも飛びきり、切れ味の鋭いやつ。微妙なバランスを保っていた、この生ぬるい空間を、父さんのぎこちない気づかいをすぱっと切り裂いた。

「ごめんな」

父さんはぼつりと言った。僕は自分から飛び出たナイフに驚いて、また無言。もう、二度とナイフが出てこないように、僕は唇をぎゅっと強くかんだ。

この部屋はなんだか、少し寒いなあ。僕は、ふと思った。きっと、そう、心の問題じゃなくてエアコンが効きすぎているんだ。半そでのシャツから突き出た僕のか細い腕に、鳥肌が立っている。ここは寒い。これ以上この部屋にいたくない。僕がここにいる、父さんが悲しくなるだけだ。

「ごちそうさま」

僕はつぶやいて、食器を流しへと運ぶ。

「ちょっと外を散歩してくるよ」

リビングを出るときに、父さんの背中に向かって言った。おう、と父さんは振り返って僕を見ることもなく、ただ手を挙げて返事をする。

靴を履いて玄関のドアを開けると、僕は学校へ登校する時のようについ、行ってきます、と口にしていて。その瞬間に、初めて気づいた。僕の行ってきますは、父さんの行ってきますと、とてもよく似ている。